

WCRP

6

2023

June

No. 524

World Conference of Religions for Peace Japan



G7サミットに向けた宗教者による提言書を岸田首相に提出（5月15日、首相官邸）

こころの扉—「非暴力の招き」弘田しずえ	2
「宗教者による祈りとシンポジウム」を開催	3～5
提言書を岸田首相に提出	5
「青年部会発足50周年記念行事」を京都で開催	6～7
人身取引防止タスクフォース主催 学習会開催のお知らせ	8
和解の教育タスクフォース主催 学習会開催のお知らせ	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「非暴力の招き」

WCRP日本委員会
人取引防々スカー
身オースメルセ
フリス・メルセ
ベス修道女会員
教修道女会員

弘田しずえ



国際パックス・クリステイのカトリック非暴力イニシヤティブは、2016年から非暴力の精神と実践を現代世界の様々な暴力の現実にも訴える働きを続けています。行動的な非暴力とは、単なる平和主義ではなく、生き方であり、霊性であり、社会変革のための積極的で強力な力であり、国際社会の平和を構築する具体的な手段です。それは、一人ひとりの人間の尊厳、権利、対等の真理に根ざし、暴力や殺傷力を伴わずに、暴力を終わらせ、紛争を変革するプロセスであり、弱者を保護するための手

段です。行動的な非暴力は、正義を実現する方法であり、創造的な関与と断固とした抵抗によって、勇気ある人々の力を結集します。非暴力は紛争から逃れるのではなく、積極的かつ力強く紛争に関与し、それを変革します。

カトリック非暴力イニシヤティブのメンバーは、2022年5月にウクライナを訪問し、ウクライナ国内において非暴力の抵抗を続けている人々に出会い、非暴力の抵抗は、実際人々のいのちを守り、暴力を変革する可能性のあることを確認しています。具体的には、ロシア軍

が侵攻している場所において、タンクを止める非暴力の抵抗、捕虜の交換の交渉、避難路の確保の交渉などによって、ウクライナ軍が武力による抵抗を展開している場所よりも死者、負傷者の数が遥かに少ないことが実証されています。米国防務省の調査も、武力によらない紛争解決が、恒久的平和をもたらすことを実証しています。

教皇フランシスコは、毎月祈りの招きの短いビデオ・メッセージを発信していますが、今年3月30日、傷ついた世界の癒しのために、非暴力の精神と実践が教会の中心的な使命であることを指摘し、「非暴力の文化」のために4月の1ヶ月間祈るよう世界中の人々に呼びかけました。「日常生活においても、国際関係においても、非暴力を私たちの行動の指針にしてください。そして、非暴力の文化を広めるために祈りましょう。非暴力は、国家と市民が武器の使用を減らすことを意味しています。戦争、武力によるすべての対立は、常に敗北に終わります。暴力なしに生きること、話すこと、行動することは、何かを放棄したり、失ったり、あきらめたりすることではなく、全てに対して明確な意思を持つことです。非暴力は、日常生活においても、国際関係においても、私たちの行動の指針となります」

ミャンマー、ウクライナ、スーダン、銃による市民に対する無差別の殺戮の現実に対して、信仰に基づく宗教者の非暴力の決意と行動が、さらに求められています。

合掌

「宗教者による祈りとシンポジウム」を開催 G7広島サミットに向けた提言書を探択

「宗教者による祈りとシンポジウム」が5月10日、広島市のカトリック幟町教会・世界平和記念聖堂で開催された。これは、同市で5月19日から21日まで開催された主要7カ国首脳会議（G7広島サミット）を前に、平和な世界に向けて祈り、宗教者の役割と行動を再確認し、メッセージを発信するもの。会場には約200人が集まり、オンライン配信を通じて11カ国から約300人が参加した。

第1部の「宗教者による祈り」では、中村憲一郎師（立正佼成会参務）の開会あいさつに続き、森重昭さん（浄土真宗門徒）



第1部「平和に向けての宗教者による祈り」

が被爆体験を証言した。森さんは9歳とき、爆心地から2・5キロの橋の上で被爆。2人の友人の陰になつたことや川の中に吹き

飛ばされたことで、やけどを負わずにすんだ。しかし、上空でB29の爆音が聞こえたため、道で倒れている人や助けを呼ぶ声を無視して泣きながら逃げた。森さんは、当時の地獄絵図のような市街の様相を語る一方、同市内で被爆した米兵捕虜について調べ、米国で遺族にその事実を伝える活動についての体験を語った。

このあと、神道、仏教、キリスト教、イスラーム、新宗教、アジア太平洋諸宗教青年ネットワーク（APIYN）の代表者がそれぞれの平和の祈りを捧げ、最後に参加者全員で黙とうした。

第2部のシンポジウムでは、戸松義晴理事長（浄土宗心光院住職）が開会あいさつを述べ、三宅善信理事（金光教春日丘教会



第2部「G7広島サミットに向けてのシンポジウム」

教会長）をモデレーターに、7人が発題を行った。最初に登壇した平和研究所の西原廉太副所長（立教大学総長）は、2006年

から16年間、キリスト教諸教会の協議体である世界教会協議会（WCC）の中央委員を担ってきた経緯から、WCCの「核」に反対する第一義的根拠は、「それが健康と人道と環境について懸念を生むからであり、軍事的であれ、民生用であれ、核の技術は自然界に存在しない有毒の元素を大量に生み出し、同時に世界で最悪の環境汚染を引き起こすからだ」と述べ、核産業について「安全」という言葉を使うことはできないと指摘。そして「地球温暖化防止、カーボンエミッション、カーボンニュートラルをめぐる議論の中で、原子力エネルギーの容認、もしくは積極的受容といった声が見えることに大きな危惧を抱く」と警鐘を鳴らした。

また、ロシアによるウクライナ侵攻についても言及。「ウクライナで、いまこのときも尊いいのちが奪われ、核の脅威が格段に高まっている現下で、私たちは『死』ではなく、いまこそ『いのち』を選ぶようにと変わらなければならない。戦争と暴力、死と核の恐怖から脱出する、『正義と平和、いのち』の道を選び、共に歩まなければならない」と訴えた。

続いて、ピースボートの畠山澄子共同代表、APIYNのレンツ・アルガオ議長、MISA4 the Pacificのベテ

イ・ラキュレ代表、中国新聞社の宮崎智三特別論説委員、カトリック広島司教区の白浜満教区長、浄土真宗本願寺派西善寺の小武正教住職が各々の分野の立場から平和へ向けた意見を述べた。

次に、提言として「G7広島サミットに向けた宗教者提言」『ヒロシマの心』が導く持続可能な平和をめざして」が、ACRPの神谷昌道シニアアドバイザーのモデレーターのもと、円応教智章・海外布教センターの深田章子所長が読み上げ、満場一致で採択された。

最後に、田中庸仁理事（真生会会長）が閉会あいさつを述べた。

なお、黒住教婦人会の黒住昭子会長が総合同会を務めた。

G7サミットに向けた宗教者提言

「ヒロシマの心」が導く持続可能な平和をめざして」
78年前、1発の原子爆弾によって広島は街は廃墟と化し、おびただしい数の無辜の人々が犠牲になった。原爆死没者慰霊碑に刻まれている「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませんから」との碑文は、すべての人びとが原爆犠牲者の冥福を祈り、戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓うものである。同時に、過去の悲しみに耐え、憎しみを乗り越え、全人類の共存と繁栄を願い、真の世界平和の実現を祈念するという「ヒロシマの心」を現している。

2023年5月10日、私たち宗教者は、被爆者や各国の平和を希求する市民社会の代表者とともに、広島原爆爆心地から1・2kmにある世界平和記念聖堂に集い、G7広島サミットに向けて、私たちの提言を表明する「宗教者による祈りとシンポジウム」を開催した。

まずもって私たちは、G7サミットが広島で開催されるに際し、G7サミット参加国指導者に、この「ヒロシマの心」の真意を深く胸に刻んでサミットに臨むよう、心から切望する。これを除いては、いかなる有益な会合もなし得ない。ゆえに、「ヒロシマの心」を国際政治の場において、着実に具現化することを強く要請する。

そのために、平均年齢84歳を超え、心身に深い傷を負いながら「再び被爆者をつくらない」「戦争をやつてはいけない」という信念で、人道主義にもとづいた核兵器廃絶を訴え、「ヒロシマの心」の実現に身を挺して取り組まれている被爆者の声に、真摯に耳を傾けることを提案する。

現在、国際社会には戦争や紛争のみならず、さまざまな暴力が蔓延し、深刻な問題が頻発している。この背景には、過剰な自国中心主義があり、自分の国さえ良ければよいというその考えが、独善的で排他的な風潮を国際社会に増長させているのである。また、行き過ぎた利益追求が世界に過去最大の経済格差を生み出し、グローバルサウスの貧困を慢性化させている。さらには、人類の生存のための大切な資源が浪費され、気候変動も加速度的に悪化しており、地球と人類の持続可能性への筋道を立てることを困難なものにしている。

この世界情勢において、私たち宗教者は、G7サミット参加国指導者とともに、将来の地球社会の平和と持続可能な世界の実現に対する責務を果たす決

意である。私たちは、2019年ドイツ・リンダウ市で開かれた第10回WCRP世界大会で、世界の宗教者と共有した「他者と自己の幸福は本質的に共有されるものであり」、すべての人々が「つながりあういのち」で存在しているという信念を、改めて確固たるものとする。それは、「人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである(クルアーン)」、「人にもしてもらいたいと思ふことは何でも、あなたがたも人にしなさい(新約聖書)」、さらに「怒みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みを捨ててこそ息む(法句経)」など、多くの宗教に共通して歴史的に語り継がれてきた信念である。

この信念にもとづき、ここに、地球と人類の持続可能性に向けて、G7サミット参加国に対する私たちの切なる提言を、以下の通り表明する。

提言1…分断から和解、対立から対話へ
現在、国際社会は戦争や紛争によって多くの対立、分断が起きている。ウクライナ戦争をはじめ、世界は敵と味方に分かれることによる強い相互不信がはびこっている。戦争助長や敵国攻撃といった好戦的な姿勢は、暴力の増大を促し、より多くの悲劇を生じさせる。G7サミット参加国は率先して、戦争終結に向け、分断から和解へ、対立から対話への発信と実践を強くすること。

提言2…核戦争回避と核兵器廃絶

ウクライナ戦争によって核兵器使用のリスクが高まっている今、核兵器使用が全人類、全生態系の壊滅を導くという危機感を強く示し、いかなる場合であっても核兵器使用は許されないとメッセージを繰り返し発出すること。そして、広島、長崎をはじめ

めとする被爆者が訴えるように、何よりも約1万3000発もの核弾頭が地球上に存在していること自体が問題である。G7サミット参加国は、早急に核兵器を廃絶する意思を表明し、そのための法的措置をとる具体的な政策を実施すること。

提言3…地球の持続可能性への責任

国連は、早ければ2030年には世界の平均気温が産業革命前よりも1.5度上昇すると警告を発している。G7サミット参加国は、現状の気候変動対策をさらに加速させる必要がある。今世紀半ばに温室効果ガス排出量を実質ゼロにするというパリ協定遵守への強い意思を再確認し、各国においてカーボンニュートラルの達成時期をより早めた法的基盤を設けること。

提言4…SDGs達成への責任

今年、2030年までのSDGsの中間年である。世界全体のSDGs達成度は、ここ数年の間に減少しているといわれている。新型コロナウイルスのパンデミックやウクライナ戦争による、食糧安全保障の脆弱化やエネルギー価格の高騰などが原因である。G7サミット参加各国は、改めて、SDGsが、人類の生き残りをかけたサバイバル目標にほかならない最優先課題であることを肝に銘じ、SDGsの達成に必ずや責任を持つて取り組むこと。特に議長国日本は、ジェンダーや国籍などによる差別状況の改善の達成度は低いとされている。早急にSDGs対策の向上を図ること。

提言5…極端な経済格差の是正

約2000人の裕福な人々が持つ富は、貧困層に属する46億人の富の合計よりも多い。このような異常とも言える経済格差は、急激なデジタル化による産

業構造の変化やコロナ禍においてますます広がっている。富裕層は富む一方で、貧困層はますます困窮しており、格差の負の連鎖が強まっている。今こそ、一人ひとりの人間の尊厳を堅固に守る「人間の安全保障」の観点から、この非倫理的な状況の改善に向けて、G7サミット参加国は、経済活動における適正分配に配慮し、所得や資産の不平等の減少に責任をもって取り組むこと。

提言6…宗教の自由の堅持

2019年、世界人口の79%が、宗教または信教の自由に対する深刻な侵害が存在している国に住んでいると報告されている。このことは宗教に関わる暴力や差別を引き起こされる要因となっている。すべての基本的人権の基礎である信教の自由は、何よりも優先されるべき権利である。G7サミット参加国は、権威主義的な国家が増える昨今の国際社会の中で、信教の自由が脅かされる現状を注視し、この自由を堅持するあらゆる方策を講ずること。

私たち宗教者は、G7広島サミットが、真に地球と人類の持続可能性を高める有益な契機となるよう、心から祈りを捧げ、かつ私たち自身の平和に対する責務を果たすべく、たゆまず行動するとの誓いを新たにするものである。

2023年5月10日
 (公財)世界宗教者平和会議(WCRP) 日本委員会

提言書を岸田首相に提出

「宗教者による祈りとシンポジウム」で採択された「G7広島サミットに向けた宗教



首相官邸にて

者提言」を5月15日、岸田文雄首相に提出した。
 この日、首相官邸を訪れた戸松義晴理事長(浄土宗・心光院住職)、宍野史生特別会員(日本宗教連盟理事長・神道扶桑教管長)、田中恆清評議員(神社本庁総長・石清水八幡宮宮司)、庭野光祥理事(立正佼成会次代会長)、宮本恵司顧問(妙智會教団法嗣)、河田尚子女性部会副部会長(アル・アマーナ代表)、黒住宗道理事(黒住教教主)、白浜満カトリック広島司教区教区長、篠原祥哲事務局長が、岸田首相に面会し、提言書を手渡した。

席上、戸松理事長が提言書の内容を岸田総理に説明。提言書を受け取った岸田首相は、戦争被爆地の広島でG7サミットが開催される意義を述べたあと、「核兵器のない世界を目指す機運を再び盛り上げるきっかけにしたい」と語った。

「青年部会発足50周年記念行事」を 京都で開催

WCRP日本委員会の「青年部会発足50周年記念行事」が5月13日、京都市の天台宗蓮華王院三十三間堂、立正佼成会京都教会で開催された。これに諸宗教青年交流・協力の礎を築いてきた歴代の青年部会幹事長をはじめ、宗教青年ら約350人が集った。会場の様子はオンラインで同時配信された。

青年部会は1973年、世界平和への貢献を目的に「出会い・啓発・実践」を活動



出会いと再会に笑顔がこぼれる

方針として
発足。以来、
サマーキャ
ンプや公開
学習会など
さまざまな
諸宗教青年
交流プログ
ラムを展開
してきた。
第1部の集
「祈りの集



1000体の観音様に見守られながら



「祈りの集い」の様子

い」は、三十三間堂本堂で杉谷義恭幹事長（天台宗国際平和宗教協力協会専門委員）を導師に天台宗の様式で読経供養が行われた。続いて、諸宗教指導者やアジア太平洋諸宗教青年ネットワーク（APIYN）の代表、青年部会幹事による献花の後、参加者全員で黙とうし、世



記念式典の様子

界平和と人類和合を祈念した。集いの最後には、日本委員会の杉谷義純評議員（天台宗妙法院門跡門主）があいさつに立った。

第2部の「記念式典」は会場を立正佼成会京都教会へ移して開催された。主催者あいさつとして杉谷幹事長が登壇し、「目まぐるしく変化する社会の中で対応できる俊敏さと感性を持っているのが青年」と語り、青年の役割を強調した。次いで、これまでの青年部会の諸活動を振り返る映像「50年の歩み」が上映された。

その後、戸松義晴理事長（浄土宗心光院住職）、青年部会第5代幹事長の三宅光雄評議員（金光教泉尾教会会長）、日本ユニセフ協会の早水研専務理事、APIYNのレックス・アルガオ議長が祝辞を述べた。

行った。
 小堀師はまず幹事長時代の体験について語り、「縁や出会いのきっかけは、いろいろなチャンスを含んでいるが、折々の出会いで得たものを自分が目指す目的へと近づけていくことを青年部会で学んだ」と当時を振り返った。また、「宗教は心を支える一本の杖」と明示し、「杖には一本一本特徴があり、自分に合ったものを選んでいくことが宗教者の姿勢であるが、強制的に『杖を使わないと不幸になる』と押し付けるような態度が見られることによって、宗教に対す



小堀参与

第3部の「シンポジウム」では、弓矢八幡の林丈嗣教主ら8人による「女ひとり」の演奏に合わせ、第7代

る信頼が揺らいでいる」と指摘した。そして、参集する青年へ向け、宗教者としての使命感を自覚してほしいと語りかけ、さまざまな「杖」の魅力を共有する機会が青年部会での「出会い・啓発・実践」であると激励した。

その後、ファシリテーターを村上泰教幹事（石鎚山真言宗総本山極楽寺教学部長）、鷲尾龍華幹事（東寺真言宗大本山石山寺座主）が務め、パネルトークが行われた。LINEのオープンチャットを使用し、参加者から寄せられた感想や意見を紹介すると同時に、対話型人工知能（AI）「チャット



パネルトークの様子

GPT」を活用して宗教者の役割や戦争をなくすにはどうすべきかなどについて語り合った。

最後に、大西英玄副幹事長（北

法相宗音羽山清水寺成就院住職）が閉会あいさつを述べた。

なお、日比洗紹幹事（曹洞宗禅林寺副住職・シャンティ国際ボランティア会）、八坂親准幹事（中山身語正宗青年本部長）が総合司会を務めた。

発足50周年を期した今回の行事はこれまでの青年部会の礎を築いてきた諸先達と青年が互いに交流し、世界平和の実現に向けて、新たなスタートをきる機会となった。



三十三間堂（上）と京都教会（下）での集合写真

人身取引防止タスクフォース主催 学習会開催のお知らせ

『宗教者として、いのちの尊厳について考える』国際人権とSDGsの視点から人身取引防止を目指して』をテーマに、学習会を開催します。

宗教者として、つながりあう尊い「いのち」に気づき、人身取引防止のため私たちに何ができるかを共に考えます。

○日時…7月1日

○場所…オンライン（ZOOM）開催

※プログラムの詳細及び参加方法は、WCRP日本委員会のホームページまで。



和解の教育タスクフォース主催 学習会開催のお知らせ

『戦争から和解と平和のプロセスへー私たちに何ができるのか』をテーマに、学習

会を開催します。

ロシアによるウクライナ侵攻が始まってから16カ月がたちました。この戦争は何をもたらし、どこに向かおうとしているのでしょうか。ウクライナのみならず、世界中の紛争によって傷ついた「いのち」について考えながら、平和と和解へのプロセスについて学び、私たちに何ができるかを考えます。

○日時…7月22～23日

○場所…国立オリンピック記念青少年総合センター（東京・渋谷）

※プログラムの詳細及び参加方法は、WCRP日本委員会のホームページまで。



今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し、新しい熟語を作ります。

走込（セーフ）

時差でZOOMに入る時間を間違えたり、準備や資料の発送などがギリギリになってしまった。でも、多くの人に助けられて滑り込みセーフで乗り越えられた5月でした。

WCRPの活動

《6月》

2日 第44回理事会（東京・カトリック東京カテドラル関口会館／オンライン併用）

20日 気候危機タスクフォース第1回会合（岐阜・真生会／オンライン併用）

23日 第26回評議員会（奈良・東大寺総合文化センター／オンライン併用）

26日 ストップ！核依存タスクフォース第2回会合（オンライン開催）

27日 平和研究所第3回所員会議・研究会（オンライン開催）

掲載内容の無断転載を禁ず。